

スポーツを大切に思う子どもを育てるスポーツ指導を求めて —児童のスポーツ活動の現状を把握するための意識調査—

和田 英明

本研究は、児童のスポーツ活動の現状を明らかにするために、小学校の「部活動」と「スポーツ少年団」の児童・指導者の意識を調査・研究したものである。現在、子どもの体力・運動能力が低下傾向にあることや、運動する子どもとそうでない子どもの二極化の傾向が問題にされている。指導者が何を考え、何に問題を感じているか。子どもたちはどのようなスポーツとのかかわりを望み、どのような悩みをもっているか。それらを明らかにしていくことで子どもたちの豊かなスポーツ活動を支援できると考えた。

第1章 研究の概要

第1節 子どもの体力は本当に低下しているか？

中央教育審議会の答申によると、「昭和 60 年ごろから子どもの体力・運動能力の低下傾向が続くとともに、肥満傾向の割合が増加し、将来の生活習慣病への危険性が高まっている」という。

本節では、全国的な体力低下の実態を報告書のデータからみていく。報告によると、

- ①親の世代である 30 年前の調査と比較すると、ほとんどのテスト項目について、子どもの世代が親の世代を下回っている。
- ②部活動やスポーツ少年団などで運動を日常的に行っている者の体力・運動能力は、運動を行っていない者を上回っている。
- ③体力・運動能力が高い子どもと低い子どもの格差が広がるとともに、体力・運動能力が低い子どもが増加していること。

がわかってきた。

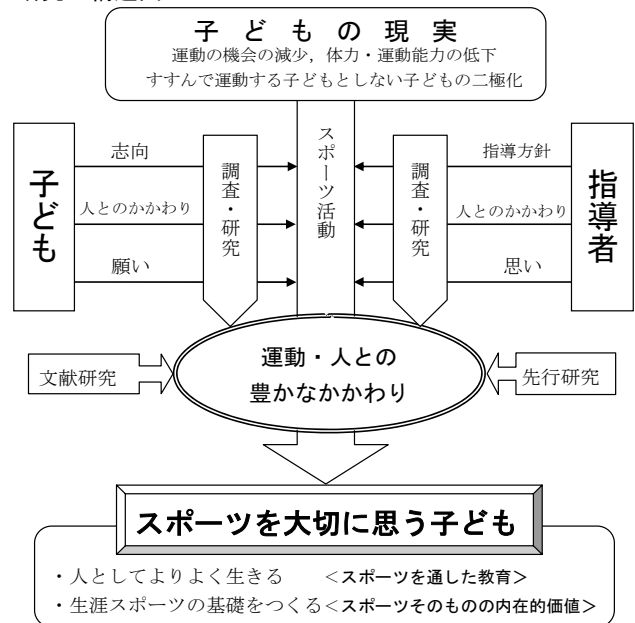
京都市でも、この 10 年で見ると、横ばいの種目も、続けて低下傾向の種目もあるが、昭和 45 年と比べると明らかに低下しているといえる。さらにいえることは上半身の筋力の低下と「走り幅とび」「ソフトボール投げ」や「連続逆上がり」のように経験が左右するものの落ち込みが大きいことがわかってきた。

ここ数年、京都市の児童の部活動への参加は、人数、割合とも増加している。スポーツ少年団も平成 13 年以降団数、団員数ともに増え続けている。しかし、一方では、体力・運動能力は停滞、または低下傾向を示し続けている。

子どもたちの遊びの文化が衰えていく中、スポーツ活動の中でまだまだできることがあるように思われる。子どもが生涯を通してスポーツとのかかわり、スポーツがかけがえのないものになるためには、どのような視点が必要になるのだろうか。

第2節 調査研究の概要

研究の構造図



スポーツに対する、指導者と子どもの意識を知るために図のような研究の構造を考え、「部活動」と「スポーツ少年団」の 6 年生児童・指導者を対象に、質問紙による調査を行った。

第2章 児童のスポーツ活動についてみてきたもの

第1節 子どもとスポーツ活動

スポーツをすることと、よい生活習慣の間に、直接の相関関係はあまりみられないが、スポーツ参加群の方がよい生活習慣を身につけている傾向がみられた。

スポーツ不参加群を含めて、児童の運動・スポーツをしたいという運動欲求はかなり高いが、不参加群に「好き」だけど「苦手」と考えている児童がかなりいる。

「苦手」であることが理由で、スポーツから遠ざかっている子どもも多く、スポーツに苦手意識

をもつ子どものためには、「スポーツは得意な子のもの」という意識を変える取組が求められる。

スポーツに参加している子どもについては、活動の頻度や苦手意識の有無にかかわらず、90%以上の子どもが、練習を楽しみにしていると同時に、活動する雰囲気は、安心してできる優しい雰囲気を望む子どもが多いことがわかった。

一方で、自由記述には、スポーツを「もっとしたい」「もっとうまくになりたい」「教えてほしい」という記述のほかに、「きびしくしてほしい」という記述も多く、第3章で「きびしい」の中身を考察していくことにした。

部活動のみ参加の子と、少年団などにも参加している子を比べると、少年団などに参加している子の方が、活動への満足度は高い傾向があった。

少年団と比べると、部活動で、子どもの運動欲求の高さに応えきれていない面がうかがわれた。

第2節 指導者の意識

指導者全体では、子どもにスポーツを通して、「一生懸命取り組むことの大切さ」を伝えたいと考える指導者が多いことがわかった。指導する中での喜びとしては、“子どもの成長”と考えている指導者が多く、教育としてのスポーツの面を強く意識していることがわかるが、部活動とスポーツ少年団では違いがあることがはっきりしてきた。

現状のスポーツ活動への満足度はスポーツ少年団の指導者の方が高い傾向がみられた。部活動ではスポーツ少年団に比べて、指導種目の競技経験のない指導者の割合が2倍であり、専門性の少なさの悩みがあることも明らかになってきた。

自由記述に見られた指導者の悩みは、以下のようなものがある。部活動(①②)、少年団(③④⑤)

- ①指導種目の専門的な経験・知識がないこと
- ②校務の忙しさから、指導に時間がとれないこと
- ③仕事や家庭生活との両立の難しさ
- ④指導者・練習時間・練習場所の不足
- ⑤指導者間の連携の難しさ

共通するもの

- ⑥言葉遣いや挨拶の大切さと指導の難しさ

第3章 子どもの豊かなスポーツ活動を支えるために

第1節 スポーツの「楽しさ」と「きびしさ」

多くの人は“楽しさ”を求めてスポーツをしているのだが、指導者と子どもの意識を比べてみた。

指導者が感じる“スポーツの楽しさ”は、次のカテゴリーのものであった。

- 「チームワーク・人間関係(人とのかかわり)」
- 「汗をかくこと、体を動かすこと(爽快感)」
- 「達成感」

それに対して、子どもが求めている“スポーツの楽しさ”は「達成」や「競争」であった。つまり、子どもたちはある意味“真面目にスポーツしたい”と願っているわけである。

指導者は、部活動では、運動する「楽しさ」を伝えようとし、少年団では、スポーツを通して育てたい「大切さ」を伝えようとしていることがわかった。どちらも大切なことであるが、子どもにしっかりと伝わるのが最も重要なことである。

子どもたちの記述に「きびしくしてほしい」という表現が多くみられたが、これは“真面目にスポーツしたい”子どもが、指導者にスポーツに集中できる環境を求めているための『きびしさ』であることがわかった。

第2節 スポーツが自分にとってかけがえのないものになるために

「体力・運動能力の低下」を考えたとき、子どもの現状を改善させるためには、「適切な運動」と「適切な生活習慣」の良い循環が必要である。

そのためには、運動が苦手なスポーツから遠ざかっている子をスポーツ活動に参加させることが大切である。体育学習の中で「やればできる」という“有能感”をもたせることができれば、子どもは、今の自分にあつた運動・スポーツとのかかわりを探していくことができるはずである。

スポーツを通して、「一生懸命取り組むことの大切さ」を伝えるための指導者の役割は「どの子どもが、自分の努力でなんとかなりそうだと思う条件」を作り出すことにあると考え、次の4項目について考察した。

- ①「技術や戦術にかかわることの指導」
- ②「活動の場やルール工夫」
- ③「スポーツマンシップとフェアプレイ」
- ④「子どもの心身の健康」

体育学習や部活動において、スポーツのマナーは学習内容として重視されてきたとはいえないのではないだろうか。マナーやエチケットを含めスポーツマンシップやフェアプレイの意味と大切さを、子どもと共に考えていかなければならない。

「人を大切にする」スポーツを通して、子どもはスポーツの“楽しさ”と“意味”を知り、スポーツが自分にとってかけがえのないものになるはずである。最後に、京都市の小学校での部活動の取組についていくつか紹介する。